

## 早稲田大学 教育学部 生物 講評

出題形式	記述式
試験時間	60分
特徴・その他	昨年度同様の大問数で、小問数こそ18問から17問に減少した。問題は教科書レベルの問題とともに、やや答えづらい論述問題を含む出題が見られた。2015年には計算問題が出題されていたが今年は見られなかった。2016年から引き続き描図問題が出題された。例年解答制限字数が比較的短く、解答をまとめるのに苦労する場合が多い。

## 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	恒常性	《内分泌と恒常性》 問2については頻出の分類からさらに進んで「タンパク質ホルモン」と「ペプチドホルモン」の区別が問われ、用語の定義に戸惑い解答できなかった受験生が多いと思われる。問4では毎年の描図問題は甲状腺となったものの副甲状腺の位置を正確に答えられなかったものもいたと思われる。問6ではバセドウ病の症状が問われた。ホルモンについては「構造(ペプチド・タンパク質・アミノ酸誘導体・ステロイド…)」「機能」「分泌調節」「分泌様式」「関連疾患(過剰・過少)」をまとめて覚えておきたい。あまりに「バセドウ病」の疾患名のみが有名であるが、甲状腺ホルモンが「代謝(とくに異化)促進」であると考えれば容易である。	標準
II	遺伝子・細胞	《突然変異・細胞内共生》 全体的に標準的な論述も多く、得点が望まれる問題である。問4ではモータータンパク質の例で学習した知識である。問5では細胞内共生説の基本知識が問われている。問6はやや答えづらいが、図表から「ストーリー」を推定するだけで特別な知識は必要としない。	標準
III	生態系	《物質循環・エネルギー》 毎年生物基礎最後の範囲、とくに生態系分野の出題が見られる。本問は特に教科書的な出題が多く、得点を望まれる。問5では「エネルギーは一方通行である」という本分野の最重要事項(往々にして強調されない場合が多いが…)が理解できたかを問う問題である。	やや易

## 〔総合コメント〕

全般的に頻出問題からの出題が多いため、まずは教科書レベルの問題と入試の頻出問題を入念に演習することが必要不可欠である。その上で、必要な図やグラフについては必ずその意味や概略を説明でき、自分で描図できることが目標である。また、解答字数を絞った演習が望まれるので入試直前には特に演習を積んでおきたい。